鳥取市教育センターだより

第３号　平成２６年１月１４日発行

〒680-0053
鳥取市寺町１５０番地
ＴＥＬ　0857-36-6060
ＦＡＸ　0857-26-3878
E-mail kyo-center@city.tottori.lg.jp

「二つの眼」

早いもので、平成２６年がスタートして二週間が過ぎようとしています。改めまして、謹んで新年のお慶びを申し上げます。今年が皆様にとりましてさいわい多き一年でありますよう心よりお祈りいたします。

ある本によりますと、「さいわい」には「幸」と「福」の二文字があるそうです。幸いの原因が自分の中にない、偶然的な、他より与えられた幸いを「幸」といい、自分の苦心や努力によってかち得た幸いを「福」というそうです。新年を迎え、神仏にいろいろな願いを掛ける人も多いと思いますが、忘れてはならないのは、他力本願ではなく、志を立てて日々取り組むことではないでしょうか。

さて、話は私的な内容になりますが、私には理想とする「二つの眼」があります。教職生活三十数年の中で、多くの先輩や後輩そして保護者・地域の方と出会ってきました。その中で、右の眼と左の眼の大きさや眼がかもし出す力の違いを感じる数人と仕事を共にすることがありました。その人の顔を見ながら話をしていると、一方の眼からはすべてを受容するような温かく大らかな印象を受け、そしてもう一方の眼からは先を見据え、様々な困難を克服していこうとする力強さややる気を感じるのです。この二つの眼は、子どもたちの前に立つ教職員にとってはとても必要なものだと思います。すべての子どもたちを受け入れる中にも、学ぶべきことはしっかりと身につけさせる凛とした姿勢、また、今の成果や課題を的確にとらえながら、教育改革の流れを先取りしたり未来の子ども像・学校像に向かって教育実践する態度は、今後ますます求められるものと思います。毎朝、鏡を見ながら今の自分の成長度と今日一日の活力を映し出してみてはいかがでしょうか。私も、人や今を大切にしながら、理想を求めて立ち向かっていこうとする、そんな力を与えられる眼を持つ人間になりたいものだと思っています。「眼は口ほどにものを言い」と言いますが、人を引きつける眼になるために、先ほどの話ではありませんが、「幸」ではなく「福」の姿勢で取り組んでいきたいと思います。

鳥取市教育センターも、現場のニーズや教育課題に応じるだけでなく、先を見据えた事業を企画していきたいと考えています。今後ともご支援をよろしくお願いします。

所　長　　保木本　倫久

温故創新　研修企画係がお届けします

本年度４回にわたって実施した「言葉の力をつける教師力セミナー」の第２回セミナーで取り上げた佐藤一斎は、幕末維新の志士たちに大きな影響を与えた江戸時代の儒学者です。直弟子には佐久間象山らが、象山の弟子には吉田松陰・勝海舟・坂本竜馬らがいます。また、西郷隆盛が流刑地の沖永良部島で愛読したのが佐藤一斎の著書「言志四録」でした。言志四録は今日まで長く読み継がれている佐藤一斎の名著で、人格陶冶のための珠玉の言葉が満載です。例えば「春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら粛む」というものがあります。わかりやすく言えば「人に優しく、自分に厳しく」という意味になりますが、かっこいいと思いませんか。古典のもつ言葉の力はこういうことなのだなあと思った次第です。言志四録についての書籍は多数ありますが、「言志四録（講談社学術文庫)」「小学生のための言志四録（PHP)」「佐藤一斎一日一言（致知出版社)」などがお勧めです。

当センターでは、セミナー講師の小山敏夫先生よりご提供いただいた資料をホームページに掲載しておりますのでご活用ください。

リンク　http://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1384758229469/index.html

きなんせ！　きなんした！（English World、caravan in 瑞穂、先生のための英語塾）

小学生を対象とした「きなんせ！ English World」を４回実施しました（うち１回は瑞穂小学校と共催)。ハロウィーンやクリスマスなど英語圏の国々の文化に親しみながら、ALT たちとのふれあいを満喫しました。参加した小学生たちからは、「いろいろな英語にふれることができた」「またやりたい」という声が多く聞かれました。今後は、参加対象範囲の拡大や外国の文化だけでなく日本の文化を伝えていくような工夫もしていきたいと考えています。

また、このほど文部科学省より公表された英語教育改革実施計画には、小学校高学年での教科化と小学校中学年からの英語活動の実施が示されています。英語教育の今後の動向から目が離せません。当センターでは、小学校の先生方を対象に、「きなんせ！ 先生のための英語塾」を１月３０日（木）１８：３０より実施します。この研修会は小学校の先生方に、英語によるしゃべり場を提供するものです。参加はもちろん無料！　ナイスな ALT たちが先生方との出会いを楽しみにしています。

リンク

（第３回）　http://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1387006744207/index.html

（瑞穂小）　http://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1385009047077/index.html

（英語塾）

http://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1190788717391/activesqr/common/other/52cf724a002.pdf

「1,000 円の価値」を目標に授業の「価値」を高める

価値ある授業について考えてみました。次の指摘は非常に核心をついています。

> 公立の学校は全部タダだと思っている方が多いのですが、実際その運営には、教職員の給与をはじめ、光熱費や校舎の改修費などの経費を全部合わせると、おおよそ児童・生徒一人あたり年間 100 万円の税金が投与されているのです。すると日本の小・中学校では年間に約 1,000 コマの授業をしていますから、一コマの授業に、一人あたり 1,000 円のコストがかかっていることになります。
>
> （月刊「教職研修」2013 年 7 月号、「藤原和博の”創造的学校マネジメント入門④”」より引用）

1,000 円払っても惜しくないと言えるまでに授業の価値を高めるためのポイントとして、次のようなものが挙げられると思います。

・教材が良質であること（まずは教科書の徹底研究を）

・授業全体が見通せること（めあての板書やシャープな問題提示）

・自分の言葉でふりかえりができること（世界でたった１冊のかけがえのないノートがそこに）

・自分で考え、集団で磨きをかけること（早くできた子に「あれっ？」と思わせる発問）

これらのポイントを押さえることで、「学ぶ意欲を高め、活用力（思考力・判断力・表現力）が育つ」価値ある授業を提供することができるのではないでしょうか。「言語活動」の充実がそのための必要十分条件であることは言うに及びません。

庄司毅先生、中林義一先生にお話をお聞きしました。

従来の講話形式の教師力研修をリニューアル。本年度は「退職校長リレーインタビュー」として、先輩諸先生の熱い思いをお届けしています。これまでに、元北中学校長・庄司毅先生、元美保小学校長・中林義一先生にお話を伺いました。先人が築き上げた学校文化や教師文化、地域文化を伝承し次代へ引き継ぐ営みは、今後も継続していきます。

リンク　http://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1330580613445/index.html

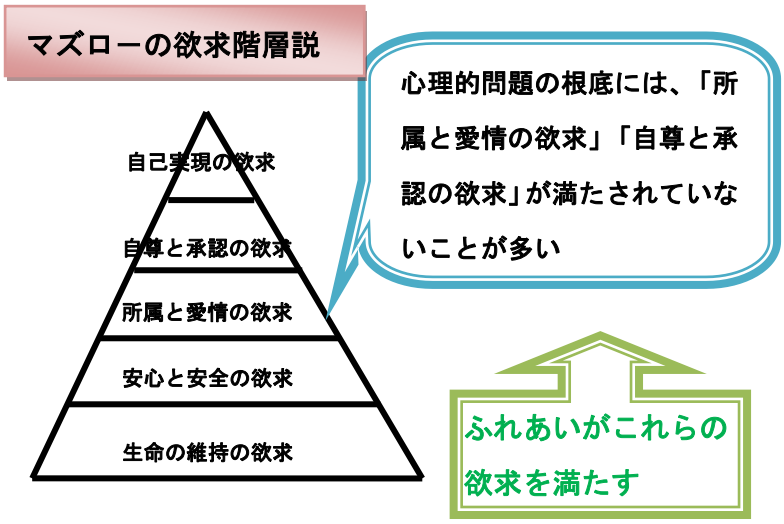
連　絡

平成２５年度鳥取市小・中学校講師研修会関係の連絡です。第２回研修実施報告書の提出期限は、２月１３日（木）です。学習指導案を添付し文書送達でお願いします。第３回研修会は、予定どおり１月２４日（金）各会場校で実施します。

教育相談より　ワンポイント

よいふれあいの法則

学校では、先生と子どもがいつもコミュニケーションをしています。コミュニケーションには、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションがありますが、どちらも人間と人間のふれあいということがいえます。「褒める・励ます」などは、受け取ると気持ちがよくなります。「叱る・侮辱する」などは、受け取ると嫌になります。



人間の欲求はピラミッドのように５段階で分けられる。下位の欲求がある程度満たされたら、上位の欲求を求めるようになる。

さて、**人間は気持ちのよいふれあいを求めるもの**です。しかしながら、**気持ちのよいふれあいが得られないときには、逆に嫌なふれあいを求めてしまいます。**具体的な例をあげると、先生に褒められたいと思っている子どもが、それがかなわないとなると叱られるような行動をすることがあります。つまり、嫌なふれあいを挑発するような行動をとることが多いのです。これは、「僕(私)のことをかまってよ」というサインとも考えられます。また、子どもは**「～だから（条件）よい子どもだ」と言われ続けていると、時として自分のありのままを認めてもらっていないことに心を痛めることがあります。**具体的な例をあげると、成績が良いことだけを褒められる体験をしてきた子どもが受験に失敗して自殺したり目標学校に入学してから無気力になったりする場合があります。これは、成績が良い＝できる＝よい子という、褒められる条件がなくなったことで、自己存在感を感じられなくなったことによるものと考えられます。しかし、こういった条件つきのふれあいは「しつけ」を行うときには必要になるので、うまくバランスがとれるかどうかがポイントです。

人間は誰でも心の中に「ふれあい銀行」を持っています。ふれあいの口座があって、そこに他人から受けるふれあいを貯えていきます。よいふれあいがあると貯金が増え、嫌なふれあいがあると貯金が減っていきます。ふれあい口座の状態によって、その人が他人に与えるふれあいの種類や内容が異なってきます。**よいふれあいの預金があれば他人によいふれあいを与える余裕もあるし、他人からの嫌なふれあいを受け止められます。**逆によいふれあいの預金がないと、他人によいふれあいを与える余裕はなく、嫌なふれあいを受け止めきれないことになります。ふれあいは銀行と同じく、与えてばかりいると預金が底をついてしまうので、与えることと受け取ることのバランスが大切です。